

# チンパンジー研究からヒューマニズムを考える

松沢哲郎（京都大学高等研究院）

チンパンジーのアイをパートナーにした研究を続けています。アイが霊長類研究所にやってきたのは1977年11月なので今年で40年目になります。チンパンジーを深く知ること、「人間とは何か」という問いについて考えてきました。

統一テーマ：「ヒューマニズムについて / を超えて」のもとで、私見を述べる機会をいただきました。曰く、<「理性的動物」という人間観を招来した形而上学と対決し、「ヒューマニズム無き人間性」を説くハイデガーの思索はその際、はたして—またどのような意味で一有意義なのか。こうした問いを人文系諸分野と協同して考察しつつ、今日における「人間らしい人間(homo humanus)」の再生（ルネッサンス）を究尋することが、今回大会の課題である。>と理解しています。

学問するなかでひとつ明確になったことがあります。それは「心が進化する」ということです。人間の体と同様に、脳や心も進化の産物です。しかし、骨や歯のように化石としては残りません。新しいアプローチが必要です。人間とそれ以外の動物との比較から、人間の心の進化をあとづけるために、最も近縁なチンパンジーと人間の比較研究をおこなってきました。チンパンジーを知ることが、人間を知ることにつながると考えました。

両者のゲノム（全遺伝情報）は、約98.8%同じです。約1.2%の違いしかありません。共通祖先は500–700万年前にいたと推定されています。両者に同じものがあればそれは共通祖先に由来し、違うものがあればそれは共通祖先から分岐して独自に進化した過程で獲得されたと考えられます。

人間をそれ以外の動物たちと比較することで心の進化を探る「比較認知科学」と称する学問です。比較認知科学は、霊長類学を父として、心理学を母として生まれた新しい研究分野です。では、チンパンジーの研究から何がわかったのでしょうか。自分自身がこれまでに主導した研究成果を大胆に3点にまとめてみました。

第1に、チンパンジーには人間よりも優れた記憶能力があることを発見しました。コンピューター利用の認知実験という手法をチンパンジーで確立した成果です。モニター画面のでたらめな場所に1から9までの数字が出てきます。1を指で触ると2から9までのすべてが白い四角形に置き換わります。その四角形を、2があったところ、3があったところ・・・と順番に触れば正解です。一瞬見ただけで、どの数字がどこにあるか、若いチンパンジーは記憶できます。ぜひ、HPで確認してください。<http://langint.pri.kyoto-u.ac.jp/ai/> これまで、人間こそがすべての動物のなかで最も高い知性を持っていると信じられてきました。だから、チンパンジーが絵を描く、道具を使う、手話で意思を伝えるとしても、そう驚くことはありません。しかし、「チンパンジーはできるが人間にはできない、彼らのほうが人間より優れている。」そうしたものを初めて見つけたことになります。人間中心的世界観への決別になりました。

第2に、チンパンジーに石器を使う文化があることを発見しました。西アフリカ・ギニアのボツウのチンパンジーは一組の石をハンマーと台にして、硬いアブラヤシの種を叩き割って中の核を取り出して食べます。4–5歳になって初めて石器を使えるようになります。そこには「教えない教育・見習う学習」と呼べるチンパンジー流の教育法があります。

親は手本を示すだけです。ほっておいても子は親をまねる。親と同じようにしたいという強い動機づけがある。そして、子からの働きかけを親は寛容に受けとめます。そうして親から子の世代へと引き継がれる文化的伝統のあることがわかりました。

第3は、人間がもつ想像するちからの発見です。チンパンジーの子どもの心はヒトの子どもと同様に育っていくことがわかりました。違いもあります。チンパンジーは、一瞬で数字を記憶することにはたけていますが、目の前にない物に思いをはせることは苦手です。言葉の学習が難しい。言葉と、それが指し示すもののあいだをつなぐには、想像するちからが必要だからです。人間はその進化の過程で、短期的な記憶能力を失い、その代わりに想像するちからや言葉の能力を獲得してきたと考えられます。そして親子や仲間とともに暮らすなかで、思いやり、分かち合い、慈しむ心をはぐくんできたのです。

チンパンジー研究を通して見えてきた、人間の心の進化についてお話ししたいと思います。霊長類学という学問はサルの研究と思われがちですが、それだけではありません。そもそも「人間とは何か」を問うことから生まれてきた学問です。拙著、「想像するちから」(岩波書店、2011年)を参照いただければ幸いです。